

認識の現象學的解明に就いて

速水 敬 二

- 一、作用意識の立場としての現象學。
- 二、對象意識の本質としての志向性。
- 三、感性と悟性との現象學的關係。
- 四、充實的綜合としての認識。
- 五、現象學的認識論に於ける自我の問題。

一

意識の學が掲げる方法と問題とに如何様の種類のものがあるにしても、それが遭遇する最初の事柄は意識の反省が如何にして可能であるかであらう。然るに反省も亦意識に於て成立する所から意識の反省とは何を意味するか。意識の本質學としての純粹現象學の成立の根據が依存すると思はれるこの根本問題を取扱ふことによつてその本來の立場を考へてみやう。

意識現象が單なる主觀とか客觀とかではなくして必ず主觀・客觀の關係に成立し、従つて「或るものに就いての意識」たることは現象學的に確立された命題であるのみ

ならず、又何人も不可疑的に許す所であらう。現象學的考へ方から一見遠く離れて居るナトルブも、意識とは對象が自我に對して存することであるとして所謂志向性を認めて居るが、かゝる對象存在は再び對象とはなし得ないであらう⁽¹⁾として意識の反省の不可能を主張する様に思はれる。若し意識が對象となるならばそれに對應する新たな主觀を必要とし、主觀客觀の關係としての意識ではなくして、客觀に投影された意識が反省し得るのみであらう。併しながら、對象が自我に對してあることを知らずして意識はかく定義も出來なければ、又意識をその契機に分つことも出來ないではなからうか。音の知覺は聽き得ないにしても何等かの仕方にかゝる知覺が知り得なければならぬ。而してそれは意識を對象として知るのではないから、音を知覺する際の主觀客觀の關係とか、ノエシスノエマ的關係で知られるのではなくして、かゝる雙關自らの自覺的仕方であらねばならぬ。ブレンターノは第一次客觀と第二次客觀とを分つて意識は對象を志向するのみならず、内部知覺の對象であり、無意識的意識の存し得ない所から對象の意識には必ず内部知覺の同伴することを主張した⁽²⁾。言葉の曖昧にも拘らずこの主張には意識の構造にとつて不可缺のものを含む様に思はれる。ブレンターノの用語の不正確な點はフツセルも之を舉

げて居る、即ち内部知覺を外部知覺から區別する明な徴表なく、この區別の代りに寧ろ十全知覺と不十全知覺の別を認識論的に適當とす可きである⁽³⁾と云ふが尙内外知覺の別も否定するのではない、但し内部知覺に於て自覺的意識を解して居るかに就いては疑問である。又一般に現象學的には外部知覺は必ずしも感性知覺と一致せず、⁽⁴⁾知覺概念は擴張されて範疇的對象一般に對應する意識も之に包攝され、ノエマは内在的對象である所から内部知覺の對象とも解される。今以上の多義を排して言葉の明瞭を期する爲めに對象意識と作用意識とを分ち、前者に於ては如何なる意味にても對象を志向する意識を、後者に於てはかゝる對象意識の自覺的意識を解することによつて、一方ナトルプの考に存する二律背反から脱し、他方ブレンターノの考ふる意味を一層明にし得ると思ふ。

然らば意識は如何なる構造を有するか。フツセールは之を氏の「論理的研究」に於て志向的體驗として特色附けたが、その精細な分析にも拘らず尙重大な不明瞭を残して居ることは争へない。即ち體驗を單に對象に對する作用の側を意味する場合と、對象作用の雙關の意識の意味に用ひて居る場合とがある。例へば對象は知覺されるが體驗されない。換言すれば對象は體驗の實有的契機ではないとし、他方意識

とは知覺を持つことであり、想像、判斷等が體驗されることを意味すと。後者に於ては、若し體驗と意識の概念を同じ外延、内包を有すと考へる限り、對象もそれに對應する作用も共に意識に實有的に存するのではなからうか。然らざれば氏の「先驗的意識」に於て、對象の内在とは如何なることか解し得ない。「論理的研究」では尙ブレンタ
 ーノの心理學の影響の下にあつた爲に「志向的體驗」が主としてノエシスの側と解され、従つてその契機たる「材料」の概念もノエシスの材料であつてノエマの意味と直ちに同一視することは出来ない。この點はフツセル自身も認めて居る。⁽⁶⁾今志向的體驗の代りに先驗的意識の概念を顧みることによつて意識の構造及び現象學の立場は明にされるであらう。ブレンターノの云ふ如く意識は必ず意識的意識であり、對象を志向すると共に志向自ら知られて居なければならぬが、志向を知ること志向關係で解することは出来ない。何となればこの際知るものと知られるものがノエシスとノエマとの關係にあるとすれば、それは又一つの對象意識であつて自らを知る爲に更に高次の意識を必要とし、結極無限後退に陥らざるを得ない。然るに「我意識」が最も明白に知られる所以は意識現象が單なる現象的存在ではなくして眞實的絶對的存在であり、對象への志向が陰影なしに又隈なく知り得るによるが⁽⁶⁾

このことは意識現象が單なる對象意識に止まらずして自らを知る作用意識の自覺に於て存することを云ふに外ならない。ノエシス・ノエマ的構造は對象意識の本質であるが、かゝる構造を自覺するものなくしては無意味であり、又かゝる構造が自らを顯現すること以外に知るものを豫想することは出来ないから、志向性とその自覺とは同じ意識流に屬しながら一つは對象的統一であり、他は自我的統一と解す可きである。この際二様の統一の關係に就いて更に問題があるであらう。然し乍ら自覺的意識とそれに於て自覺される意識とを分析することは兩者が同じ領域を占むとはいへ現象學的に最重要の課題であつて、出發點にとつて人は只分析を以つて満足す可きであらう。意識はかくて作用意識に於て存することを必要とし、従つて意識はその本來の在り方では反省された意識であらねばならぬ。意識學としての現象學の方法が作用意識の自覺にその重心を置くのは明瞭である。

フツセールに依れば意識は定立關係に於て成立し、その一般的特質はノエシス・ノエマ的構造を有することであるが、之に於て措定的意識と中和的意識とが區別出来る。前者は現實的作用の凡てを含み、信念の種々の様相例へば *gewiss, möglich, wahrscheinlich, fraglich, zweifelhaft* 等が夫々その客觀的對應者たる存在の様相と相關係する。

之に對して後者は之等の定立關係をその儘定立關係として含む點で等しいのであるが、尙その現實的能作を無力にし、中和化し、或は括弧附け、*dahingestelltseinlassen* する可能的定立の意識である。對象の存在に對する信念を缺く想像も *schönder Akt* でない點は中和的意識と類似するが、想像に於て想像をなすことの出来るに反し、中和的意識には繰返しが無意味なることに相違點がある。措定的意識と中和的意識とは然も注意的様態の區別ではなくして前者の *Setzungscharakter* をその儘にしなから、只その現實性を無力にして寫す意識で兩者は平行的に對應し得る關係に存する。⁽⁷⁾ 現象學的態度がこの中和的意識の立場であることはフツセルの叙述から理解し得るが、以上の區別關係には重要な問題を含む様に思はれる。措定的意識には中和的意識が平行する可能性が存するばかりでなく、前者の立場は實は意識を見る立場ではなく、それとは次元を異にする中和的意識に寫されることによつて初めて自らの定立關係に立つことを明にされるものである。中和的意識の繰返しが無意味なるは措定的意識の自覺にある故で後者を對象として志向しない爲である。又中和的意識は「働く」ことの意味が働かない如く現實的能作の措定性を排除した意味的統一の現象と考へられ、之れによつて措定的意識がノエシス・ノエマ的構造にあること

も理解されるが、新たな主観がかゝる構造を寫すと解することは出来ない。意味的統一の現象と云ふもそれがノエマの意味の象面にあることではない。言葉を以つて表現されるから意識の構造も Signifikation の對象になるとはいへ、その場合の對象はノエマが對象であると區別す可きである。若し然らずんばノエシス・ノエマの雙關を説くことは無意義であらう。言葉の到達距離が單にノエマ的事態に限らるゝならば意識は對象化することなくしては取扱へない。然しながら「自我は對象でない」と云ふ命題が正當に主張出来るのは意味賦與作用の對象としての Bedeutung が必ずしも充實的意識の對象たる Sinn と相覆はないのみならず、前者によつて Bedeutung される事柄が單に對象の範圍に止まらず、所謂主観の範圍をも表現に齎らす性質が存する點にあると思はれる。言葉のかゝる機能を正當に解すれば人はこの際對象化するといふ非難を排して意識の構造を表現し得るであらう。中和的意識はかくて何嘗現實的 Thesis を有たない高次の意識であつて、之に寫されることによつて意識は陰影附けられずに自らを顯はにし得る。中和的意識に應ずる表現は従つて又高次の表現であり、それが意識自らを寫すとしても何等模寫とか對象化する意味を含んでは居ない。

中和的意識の本質が作用意識たる點にあるは最早明瞭であると思はれるが、現象學本來の立場はこの基礎の外にはないであらう。換言すれば措定的意識の超越的態度の徹底的排除、中和的變様によつて自然的或は本體論的態度に固有な假定に着色さるゝことなしに意識の具象體の在り方をその本來の在り方に於て理解せんとする現象學的立場は自覺的仕方を除いては存し得ない。超越的態度より見られたものは必ず陰影附けられた反面及び他との關係を以つて現象し、それだけで又自明的に與へられることがない。即ち現象的存在であつても意識現象ではない。一般にかゝる態度では意識は諦視されない。併し現象學はかゝる態度こそ排除するが、かゝる態度で行はれる意識を否定するものではない。凡ての假定と超越者に對し判斷中止を以つて臨むのは事柄自らのもつ中實をその儘明化せん爲で事柄自體を否定するのではない。意識は超越的態度で潜在的に成立するが、その立場では自ら意識に於て存することの自覺が伴はず、従つて作用に獨立なものとして對象を措定する。超越的態度を無力にすること、即ち内在化、或は先驗的還元を行ふことによつて中和的意識の立場たる先驗的意識の場面に到達する。この自覺的方法である先驗的還元こそは現象學が最も重要視する所であるが、先驗的意識は尙事實と本

質との相即的意識であつて、この場面に於て先驗的事實學が成立し得る。従つて本質把握を目的とする純粹現象學は更に排除と純化とを進めて形相的還元を必要とする。意識に於ても事實と本質とは嚴密に平行し、従つて兩者は全體として直接所與であり、只還元、分析の立場で抽離し得る。本質直觀は事實直觀と共に行はれるものであるが、形相的還元の正當な意義はこの際にも事實直觀を括弧附けることに外ならないであらう。かくて具體意識は本質意識と事實意識とを並有するが前者に於ても上述の作用意識と對象意識とを分つ可きである。而して二様の還元によつて到達される純粹意識は當面の問題たる純粹現象學が耕す可き領域であつて、この場面より人は作用意識の立場としての學の實を期待し得るであらう。而してかかる現象學は對象意識の立場の本質學たる本體論より區別さるゝは勿論、後者が前者にその終極の根據と保證とを有する所以も明瞭であると思はれる。

(一) Natorp, Allgemeine Psychologie nach kritischer Methode, S. 29

(二) Brentano, Psychologie vom empirischen Standpunkt, I Bd. 2. Buch, 2—3. K.

(三) Husserl, Logische Untersuchungen, II (I), S. 355; II (ii) Beilage.

(四) Scheler, Unstaur der Werte, II Bd., S. 59.

(五) Husserl, Ideen etc., S. 267 f. Anmerkung.

(六) Brentano, a. a. O., S. 137, Husserl, a. a. O., S. 81.

(七) Husserl, a. a. O., S. 103—§ 117. I. U. II (1), S. 479 ff.

(八) Husserl, Ideen etc., S. 115.

二

作用意識が意識の構造上存在することは明であるが、この立場に立つ限り意識の自覺は可能であるから又意識學の最終の據所でなければならぬ。之に對して現實意識が行はれる對象意識の立場は獨斷的に自らの立つ地盤を顧みず、作用とそれによつて思念さるゝ對象とを互に超越的とし、對象を作用の外にあるものとして措定する。人は素朴的實在論に於てその適例を見出すであらう。併し何故に意識が成立し、如何にして意識の反省が可能であるか。互に超越的ならば兩者の交渉は到底解き得ない、又兩者を結ぶ爲の第三者を持ち來ることは問題を延長するのみで解決を與へるものではないであらう。更に時間の支配の下に存する對象意識の立場で意識を反省することは自らの影を跳躍する試みに等しいであらう。作用と對象との直接交渉は兩者を包む高次の意識に於てのみ理解されるのではなからうか。兩者を超越的とするは單に立場に關すること、立場の變更によつて超越的とされたものもその儘標號を變へて意識に包攝される。態度の變更によつて作用と對象と

は夫々獨立的存在ではなくして、一つの存在の二つの契機としてその雙關に於てのみ理解され、作用は對象を志向する限りの作用であり、對象は作用によつて志向される限りの對象である、換言すればノエシスの契機はそれと特有的に關係するノエマ的要素なくしては無意味である。⁽¹⁾かくしてその雙關に於て成立して居るものに對してその結合が如何にして可能であるか」と問ふは問題提出に際して已に異なる出發點に立つものであらう。問題は只意識が含蓄的に有つものを顯在化の道程に於て理解し直視せんとするにある。この時人は又直觀と記述との一致適合を問題とし得る、而してこの點は正に又現象學的認識論の取扱ふ最重要の問題の一つである。さて自らの立場で自らを知らない對象意識は自覺に於て始めて志向性の上に存することが明となるが、具象體としての志向性が尙ノエマとノエシスの二契機に分析されるのは同一なるものゝ見方の相違ではなく、如何なるノエシスの要素もノエマ的要素にはなり得ず、又反對も正當である絶對的區別の爲である。従つて兩者の關係は實在的空間的關係の如く兩項の入換へ得る *Existenzrelation* ではなくして正當には *„Relativisches“*⁽²⁾ と云ふ可きであらう。已にあらゆる見方を排除して只潜在より顯現の關係に於て意識を見る現象學にとつて分析とは觀點を種々移動せしむること

によつて一つのものを變へて見るのではなくして、全體として與へられたものをその契機に於て、従つて常に全體と部分及び部分間の關係に於て理解することに外ならない。意識はかくて志向性の流であるが、ノエシスに於ける微差とノエマに於ける微差とは直ちに影響し合ふ關係⁽⁹⁾に存する。

意識の最高類の本質としてノエシス・ノエマ的構造が理解されるが、表象、判斷等の類的本質とか、本質の最下層たる形相的特殊性は凡てこの普遍者志向性の意識流に於ける自己限定として解される。かゝる普遍的本質の認識の可能なる理由は説き得ないとしても、個別的形態を通して理解され得るものでなければならぬ。フツセールは想像による「自由變更」を以て意識の本質を知り得るとするが自由變更は意識類の直觀に際して類的統一の原理として役立つので、之によつて普遍者志向性が直觀されるのではない。成程自由に變更し得るものにして初めて本質を有するであらう、單なる *Diecht* があるとするればかゝるものは變更によつて夫々異なるものとして現はれその間何等本質的のものが存しないと云へよう。併し乍ら例へば判斷の本質を把握せんとするに際して判斷類を種々に變更し得るのは既にそれが判斷であることを知れる爲で、判斷を表象或はその他の意識類から區別して類的に現前世

しむるものが自由變更であらう。志向的體驗とは普遍的本質、志向性の上に存する意識の全體である。フツセルの「論理的研究」では先驗的還元が徹底されず、前節に注意した様に志向的體驗の下に主としてノエシスの側面が考へられて居たと解される。従つて *Intentionales Wesen* は體驗の概念を先驗的意識と解すると共に、對象に對する作用の側の本質ではなくして、ノエシス・ノエマ的構造と解釋し直す可きであらう。

先驗的還元は超越的態度の排除を行ふことによつて超越的實在の標號を變様して、純粹に内在的な現象學的殘基としての先驗的意識に到達せしめる。かくて超越的實在は先驗的意識ではノエマとして解され、それは又眞なる命題の主部となり得る「或るもの」として意味對象となるが、之に於ても種々の象面、即ち *Gegenstand, so wie er intendiert ist* と *schlechtlin Gegenstand, welcher intendiert ist* (或は *Gegenstand im „Wie seiner Bestimmtheiten“* *Noematischer Gegenstand schlechtlin*) とが區別される。例へば同一三角形を等邊三角形とも等角三角形とも表象し得るが等邊三角形も等角三角形も共に「同一なる三角形」に歸屬しながら之を規定する意味である。又同一三角形と云ふも意味規定に外ならないがこの際には意味規定の中心をなすと考へ得るであらう。對象自

體は意味を以つて規定し盡されぬXであつて、それに就いて意味的賓辭附けが行はれる所の意味統一者である。⁽⁶⁾かく對象的側面はノエマの意味とその核とに分析され、更に核を通して對象自體へ連なる。尙又ノエマはノエシスとの關係に於てのみ成立するから注意的變様を受け同じ對象の同じ意味も注意の如何によつて種々の差別を持つであらう。かゝる Volle Noema の構造の中對象 X は理念の意味で *Transzendenz in der Immanenz* であるが實在が超越的なるは獨立的存在の意味であつてこの場合の超越とは全く區別しなければならぬ。意味はかく自らを超へて何かを指示し、然も全體として對象的統一を有する點にその特色を有する。ノエシスはこの自同的意味を志向することによつて意味規定を實現せしめ、疑問的意味に對しては疑問的信念、蓋然的存在に對しては蓋然的信念が對應する様に意味が意味として成立する爲にはノエシスの同伴を必要とする。志向的本質はかゝる構造を有つが、之は又「論理的研究」に於て作用材料と作用性質との關係として解された。フツセールは之によつてブレントラーノが「精神現象は表象であるか表象を基とする」と云つた思想を批判して、眞に基礎となるものは材料の意味の表象であり、材料は又性質との關係に於てのみ存し、對象を意識に表現せしむることによつて體驗を客觀化作用たらし

むから、ブレンターノの命題は「意識は客観化作用であるか、或は之を基とす」と解す可きである。⁽⁵⁾ 材料はこの対象を指示し他を指示しないものとして又把捉意味 (Anfassungssinn) と呼ばれる。⁽⁶⁾ 併しながら已に作用性質及び作用材料が單に作用即ちこのではノエシスに關はるのではなくして先驗的意識の性質であり材料であることは明であるから前者を *noetischer Setzungscharakter* と *noematischer Setzungscharakter* に後者を *noetische Materie* と *nomatische Materie* に分析することが正當であらう。併し乍ら具體的意識は志向的本質の規定を以つて終るものではなく、更にそれ以上に種々の *Nuance* を含み、同一の志向的本質も意識され様によつては無數の變化に於てある。この變化を示すものが充實の契機 (*Trielle*) であり、充實に於ける志向的本質が *erkenntnismissiges Wesen* として意識の知的方面の本質をより具體的なる規定を以つて示すであらう。言語的表現に際して働く意味賦與作用も一つの志向的體驗たることは云ふまでもないが、この時の本質を特に *bedeutungsmissiges Wesen* と呼ぶ。⁽¹⁾ 合認識の本質は全ノエマと全ノエシスとの統一であつて、対象意識はノエシスの信念的性質とノエマの存在性質とが種々の様態に於て結ばれ、ノエシスの *reell* な内容と信念とがノエマの *ideell* な意味を志向し、實現し、更に対象を意味によつて規定しながら対象と連絡し、之に統

一附けられて居る所にその特性を有する。

- (一) Husserl, *Ideen etc.*, S. 195
- (二) Brentano, a. a. O. Btl. II. Anhang I.
- (三) Husserl, a. a. O., S. 265
- (四) Husserl, L. U., II (f) S. 400
- (五) Husserl, *Ideen etc.*, S. 272
- (六) Husserl a. a. O., §§. 131—132
- (七) Husserl, L. U., II (i) S. 493
- (八) Husserl, a. a. O., S. 416, II (ii) S. 91.
- (九) Kynasl, *Das Problem der Phänomenologie* § III.
- (十) Husserl, a. a. O., II (i) S. 417.

III

以上志向性を對象意識の本質として理解した。併し時間的構造を離れて對象意識は成立し得ないであらう。志向性は意識の「今」の様態の本質であるが、意識全體の具體的姿は Retention-Intention-Protection の關係で流動發展する。然も常に今の焦點を離れ得ない所に意識流の變化としての特色が存する。已に意識を一つの統一として、即ちノエシス・ノエマ的雙關として理解する以上、その如何なる形態の Individuum.

もこの構造を有することを認めなければならぬから意識の個別化の原理は材料或は意味に存すとか又ナトルゾの如く變化は内容のみに關すと考へることは出來ない。意識の何の點も一つの統一であり、實現さる可き全體に對しては部分的統一であつて、ノエシスの變化とノエマの變化とは相即的であり、又曩に解した様に性質と材料とが共にノエシス、ノエマ的契機に分析される以上性質の變化に對して材料は變化すとは限らない⁽¹⁾とも解し得ぬであらう。變化の據所としての時間に於ける在り方を考慮に入れずして意識の個別は理解出來ぬと思はれる。併しながら最も單純な一肢的名義的表象を取るも分析の立場に立つならば、單なる *Deities* としては存立し得ず、必ず本質的意識と相即的に與へられねばならぬ。今この區別の外に又之と相交錯する範疇的直觀と感性的直觀との區別關係を主題として認識の問題にとつて重要な意義を有する悟性と感性的關係を考へてみよう。カントは悟性(思惟)を範疇的論理的機能として之を感性的直觀に對立せしめるが、範疇的直觀と感性的直觀の區別が屢々意味賦與作用と直觀との區別と混同されて居ることは否定し得ないと思はれる。範疇的直觀の概念が既にカントでは矛盾であるかも知れない。然も範疇的直觀と意味賦與作用とは嚴密に區別さる可き領域に屬し、兩者を共に思惟と

呼ぶならば前者を Denken im eigentlichen Sinne 後者を Denken im uneigentlichen Sinne として區別することが妥當であらう。さて現象學は合認識の本質の分析より悟性と感性との問題への通路を取る。

ノエシスとノエマとの關係の一般的仕方を把捉形式とすれば志向の本質は又かゝる形式による把捉と云ひ得る。然るに具體的意識は凡て志向の本質の外に充實の契機を有することは前章に注意した。然らば充實とは如何なる契機であるか。表象「人」が言葉「人」に對する意味指示作用なる場合と、對象「人」に對する知覺或は想像なる場合とに就いて之を見るに、前者にあつては文字乃至音聲に對する意識内容が存し、後者にあつては對象「人」に對應する形象が意識内容として存する。即ちノエシスの側面に信念的性質に彩られた對象を意識に表現せしむる内容、或はノエシスに於ける對象の代表者を見出し得る。今一般にかゝる内容を代表者 (Repräsentant) 或は代表的內容 (Repräsentierender Inhalt) とすれば之に於て意味的内容 (signifiver Inhalt) と直觀的内容とが明瞭に區別出来る。而して知覺及び想像はかゝる直觀的内容と把捉意味との把捉形式による統一、即ち直觀的代表 (intuitive Repräsentation) を有し意味賦與作用は意味的代表を有する。而して充實の契機とはこの代表的內容に他ならないが

意味賦與作用の場合には志向的本質を充實するとしても單に音聲文字に對する内容を得るので眞の意味で充實と云ふことは出來ない。意味賦與作用が却つて直觀によつて充實を得るので、直觀的意識はこの充實の契機を以つて志向的本質を充たし對象と交渉する。⁽³⁾「論理研究」に於てフッセルはかく充實を解するが意味賦與作用と直觀との區別は單にノエシスの内容に止まらず、ノエマ的内容の區別をも認む可きであるから充實は又ノエシスとノエマの兩面を有すと解す可きである。

以上は主として一肢的作用に就いて理解したのであるが、かゝる構造は所謂基けられた多肢的意識にも妥當するであらう。判断物體は重さを有すを取るに物體、重さの表象が賓辭「有す」を以つて結合されて居るのを見る。「物體」「重さ」が個別的表象であると普遍的表象であることを問はず、判断は表象の Und-Summe の形で賓辭附を行ふのではなくして、統一ある表象の結合としての特殊の意識類である。判断の志向的本質は Gesamtqualität と Gesamtmaterie との雙關として解されるが、そのノエシスもノエマも共に表象に基けられ、又その意味で構成された事態と信念が内面的統一を有するものとして見られる。斷定的判断に於ては客觀的事態の斷定的存在性質に對して gewiss の信念的性質が關係し、假定的判断に於ても基けられた信念と存在とが

假定的なる *Setzungscharakter* を以つて結ばれる。かゝる意識形態にあつては基ける意識の一肢的名義的 (*eingliedrig=, einstrahlig=od. monothetisch=nominat*) 性質は最早かゝるものとして働かず、統一ある多肢的陳述的 (*vieligliedrig=, vielstrahlig=od. polythetisch=propositional*) 性質を有するものとして現はれる。従つて判断の直接所與はかゝる統一そのもので、基け關係は却つて分析の結果であることを注意す可きである。我々は一つの「家」に就いて判断し、家を表象し、又想像することも出来よう。然も同じく家であるにしても表象と想像、判断に於ては夫々與へられ方が異ならなければならぬ。基け關係に於て同じ家に歸せられるにしても判断に與へられた家と表象に與へられた家とは同一ではない。所與の仕方と基け關係に就いて種々の問題があるであらうが、現象學は所與を分析して基け關係に存することを見るので更に基られたものより出發して原體驗を再構成せんとするのではない。

さて所謂經驗的判断に於ては主語、客語に對應するものは經驗的知覺の對象となり得るものと考へられるが、賓辭「ある」は經驗的に直觀出来ない。然らば「ある」は意味賦與作用の對象としてのみ存するか。何れにしても「この花は青くある」に於て「ある」による花と青との結合は經驗的直觀以外の作用を待たねばならぬ。「ある」は成程意

味として成立するがそれのみでは判断といふことが出来ない、又判断は象徴的思惟に於て表現されるが、之とは別に充實に於て成立する具體的意識形態の一つである。而してその賓辭あるは經驗的知覺の客觀的對應者でないのは勿論、又反省によつて得られる概念でもなく、只判断充實に於てのみ存する所の對象、事態を統一附ける形式である。個別的知覺に個別的對象が關係する如く、かゝる事態には其れに對應する特殊の知覺が存する。このことは事態のみならず、凡ての範疇的形式、普遍的對象にも妥當し、よく用ひらるゝ次の例は事柄を最も明瞭に示すであらう。即ち三角形一般が實在的對象として見出し得ず、従つて銳角三角、鈍角三角或は直角三角形に非らざる三角形は事實存在しないとしても、三角形一般が名目的記號であるとする Nominatismus は之が實在を主張する思想と共に成立し得ない。三角形一般は特殊の知覺、幾何學的直觀に與へられたる對象であつて、それは存在しなくとも少くも成立するものでなければならぬ。曩に意識が依つて以つて成立する母胎としての「材料」の概念を擧げたが、今形式に對立する概念を正當には「素材」(Stoff)として材料より區別すれば、一般に素材的なるものに於けると同じ充實の機能が形式的、範疇的なるものにも存するを見る。イデアは象徴的思惟の對象ではなくして、その眞の在り方

は充實的意識に於て直觀されるものでなければならぬ。現象學では自己顯現の仕方^③で充實する意識を知覺と呼び、充實作用一般を直觀とし、その志向的雙關を對象と解する。理念に對する 'Idention'、本質に對する 'Wesens-anschauung' od. 'erschauung'、範疇的形式に對する 'kategoriale Anschauung' od. 'Wahrnehmung'、事態に對する 'Sachverhaltswahrnehmung' 等が凡て直觀、知覺の概念に包攝さるゝことは注目し値するが決して偶然的事柄ではない。

ノエマ的材料即ち意味に素材的なるものと範疇的、形式的、本質的及び事態的なるものが區別されたが、ノエシスの側面は凡て之と關聯することによつて對象と交渉する。而してその交渉の仕方が前者にあつては 'in schlichter Weise' に行はれ、その對象は實在的對象であつて更に他の基けを必要としない下位の對象である。之に對して後者はその與へられ方に於ては原始的であるが、分析の立場で解するならば必ず前者をその成立の條件とし、それを基として成立して居ることが理解される。我々は庭園に於て「木を見」「花を見る」、又「木と花とを知る」。この後の場合に於て「と」により結合された全體が高次の直觀により知られなければならぬが、然もそれは「木」「花」なくしては直觀し得ないであらう。而してかゝる高次の直觀の可能の根源は只綜合

的充實に求められるから、二種の直觀の關係としての「基け關係」は單に高次的直觀の可能なるに必要な條件であつて、充分な條件ではない。充分なる爲には更に所與の原理を要するであらう。

現象學はこゝに於て傳統的問題たる「悟性と感性の關係」に就いて新しき解釋を提出した者と云ひ得る。何となれば普通に對立せしめらる感性と悟性は又以上の二種の知覺、直觀の區別に外ならないであらうから。而して經驗的感性的知覺の *sich-richte Wahrnehmung* たる性質と範疇的直觀の *fundierter Akt* 或は又言葉の眞の意味では *übersinnliche Wahrnehmung* たる性質を認むることによつて悟性と感性との關係は少くとも一つの光の下に置かれるとを信じてもよいであらう。思惟とは眞にはかゝる範疇的直觀であつて、判断と思惟とを區別す可きであるならば後者は範疇的形式一般前者はその存在様式の一つたる事態に對する直觀の別である。現象學はかく知覺直觀の概念を凡ての充實的意識に擴張すると共に感性と悟性を峻別するはカントと異ならないが、カントが感性を受容能力と解し、感覺の多様が之に與へられ、豫め悟性の具備する範疇が統一を與へる所に學的經驗が成立するとしたに對し、悟性も感性と同じく對象と直接に交渉することを認むる點で重大な相違が存する。單な

る意味賦與作用でない限り、感性に基けられない悟性はあり得ない。その對象は基けられたものであつても、所與としては *leibhaftig* に或は *originär* に與へられ、又原始賦與直觀の與へる對象である。又對象が基けられるのみならず、そのノエシスも同じ關係にあり、従つて綜合作用たる所に高次の意識の特色が存する。人は範疇的直觀に於てカント學派の思惟の考と一致する所多きを見るであらうが、上述の區別が示す様に單に之を置き換へたのではなくして、現象學的分析の必然的に然らしむる事柄である。即ち充實的意識の特色として範疇的作用も範疇的直觀的代表を有しななければならぬ。範疇的に結合された對象も只その代表的内容によつてのみ現象し得る。かゝる高次の作用の性質、材料及び代表的内容は内面的統一を以つて根源的に與へられるから、之を基ける意識の契機に還元し盡せないのは云ふまでもない。範疇的形式は勿論感性の内容に基かずして、そのノエマ的材料の綜合であり、従つて作用形式ではなくして、對象形式であるが、かゝる形式の抽象が可能とはいへ、例へば「同一」は甲と乙との同一であつて基ける甲、乙なくしては直觀の對象としては無意味であり、更に同一意識との關聯に於て成立する。然らば範疇的代表的内容とは如何なるものか。無限の變化に於て現はれる感性のノエシスの内容たる第一次内容に對

して、之に基けられた反省的内容のみよりなるものを純粹な範疇的代表者として示すことが出來よう。

カントは範疇の *Formung* を悟性機能と認めるが範疇に對する特殊の作用を考慮に入れず、又所謂思惟に於て象徴的思惟と直觀的思惟との重大な區別を明にして居ない。カントとフッセルに於て根本的に方法と問題とに相違がある以上、一つを以つて他を批評することは出來ないとしても尙範疇的代表を否定することは出來ないであらう。對象を作用との聯關に於て考察する現象學が所謂悟性を對象の綜合と解せずして綜合的意識と見ることに充分の理由があると共に、より根本的な解釋への一石を投じたものであることを信ずる。

(一) Husserl, *L. U.*, II (1) V. *Untersuchung*. § 20.

(二) Husserl, *a. a. O.*, II (ii) S. 86—94.

(三) Husserl, *a. a. O.*, II (ii) S. 142.

四

對象意識が有意味作用であることは現象學的に確立されたが、以上の叙述に於て屢々現はれながら未だその關係に於て顧みられなかつた所の意味賦與作用と意味充實作用とを論ずることは現象學的認識論の取扱ふ最重要の課題である。意識は

何等かの對象を意味的規定を通して志向し、従つて意味實現作用であり、客觀化作用でなければならぬが、人は自ら知覺せず、判斷せずとも、知覺判斷の言表を通して、この言表によつて示された事柄を理解することも出来るから、同じく客觀化作用といふも單に意味指示に止まる作用と、かゝる意味が直觀に於て充實される作用とを分つ可きであり、又「人」なる意味は意味として成立するのみならず、直觀に於て充實されるに反し、黄金の山、緑の道德、圓い四角等が意味として成立するにも拘らず充實し得ない點を考ふれば意味指示作用と意味充實作用とが必ずしも相覆はない領域であることも理解出来る。合意味的本質を合認識の本質から分けた所以も正にこの點にあつた。

然らば充實作用と意味賦與作用とは如何なる關係に立つか。意味志向が必ずしも直觀に於ける充實を期待し得ないとしても、逆に直觀は既に分析が示した様に意味を規定する作用たるは明であるから、それは意味志向の特殊の作用であり、志向的體驗の一つの領域として、意味志向の層、或は可能の層の上に充足原理としての充實により限定された象面と解される。従つて又對象を常に現前せしめる層が直觀的意識の象面であらねばならぬ。而して對象を認識するとは實は意味が直觀に於て

實現さるゝことであるから現象學的認識論は意味指示を意味充實から分つと共に、兩者をその關係に於て理解せんとする。然しながら現象學は他の原理によつて之を *erkennen* せんとするのではなくして、意識自らが自らを解明 (*anfaken*) せんとする立場であるから、この際にも充實的綜合たる認識を分析して相互關係の仕方を理解するに止まり、綜合一般の如何にして可能なるかの論理的理由を求めて之によつて基礎附を行はんとするものではない。與へられた認識を分析してそれが充實的綜合に於てあることを理解せんとする試は種板に物の映像を取る寫眞術ではなくして、却つて與へられたものゝ本來の在り方に歸らんとする自覺の働らきである。さて意味の充實とは言表が直接に對象と交渉する作用によつて相覆はれ確證を得ることであるが、この際意味志向が直ちに直觀作用であるもの即ち靜的統一に對し、單に言表され、空虚に思念されたものが、それとは時間的に相隔る直觀によつて充實される動的統一が區別されよう。前者に於ては志向の充實は充實の經過ではなくして *ruhendes Erfüllsein* であり、又 *ein sich Decken* ではなくして *Das in Deckung Sein* であるが時間的綜合に特有な經過の體驗は存しない。^③ 感性的知覺にあつては充實と志向との間に何等の距離なく、従つて靜的統一であるに對し、普遍的法則の理解に際して法

則の示す意味が範疇的直觀を基として充たされ、その確實性が知られる際、人は動的統一の明瞭なる實例を感じるであらう。而して充實的綜合の意識は勿論後者に於て特に著しい。

さて意味賦與と意味充實とが相覆ひ歸一する所に認識は成立するが、前者が含む *Bedeutung* とそれを規定する後者の *erfüllender Sinn* とは如何に關係して居るか。言葉なき直觀は盲目であり、直觀なき言葉は空虚である。而して全き認識が成立することの綜合を顧みる前に、認識の象面は單に意味賦與作用と充實的作用との關係としてのみならず、充實的意識の下に高次的直觀も解されるから、感性的直觀と範疇的直觀、個別的直觀と普遍的直觀及び後に擧げる十全的直觀と不十全直觀の種々の關係組合せをも含めて理解することの注意を必要とする。概念及び命題の單なる意味指示は對象を空虚に志向し、或は間接の様態に於て對象と關係する、而してそれによつて意味される事柄が直觀に於て何等客觀的對應者を見出さない際にも、例へば互に矛盾する概念の結合の際にも尙それが無對象表象でないとはトワルドウスキーの明かにした所であるが、一般に意味賦與作用はそれのみでは對象が不定であるに止まり、無對象とは云ひ得ないであらう。かゝる作用の契機と直觀のそれとを比較す

る時、人は先づ兩者の代表的內容 (noetischer Inhalt + noematischer Inhalt) の異なることを注意する。「花」なる言葉に基く概念作用に於て、この言葉に應ずる文字、音聲等のノエマ的内容及びノエシスの内容は明に花の直觀に於ける夫とは異なる。然も我々が花を見て「花」と呼び「花」と云ふ言葉を聞いて花を想像し得るには以上の相違點の外に兩作用に一致し得るものがあつて可能である。意識の分析に際して我々の得た契機は性質、材料、及び代表者であつた。而してこの中、信念的性質とノエマ的材料とは二様の作用に於て異なる所を見ない。ノエマ的内容とノエシスの内容とが如何に變化しやうとも、凡ての花の知覺に於てそれが花であることに對する信念と、花たらしむる材料とは常に同一であるのみならず之を「花」と表現する作用に於てもこの點に變りはない。意味賦與と充實との異なる二つの作用が相覆ふ所以はこの點を置いては存しない。Bedeutung が erfüllender Sinn を一つのものである時初めて歸一關係が成立する。而して前者が後者によつて覆はれる際、單に空虚に指示されて居た事柄が直觀的ノエシスの代表者とノエマ的内容との充實の契機を獲得する。これによつて認識の過程は充實の綜合による歸一として理解され、合意味の本質が合認識の本質に於て相覆はれ確證を得ることも明になつたと思ふ。性質と材料とは凡ての意識

に本質的契機であり、内容一般も不可缺的要素であるが、意味賦與作用に於ては之と材料の結合たる意味的代表は例へば *ein, one, ...* 等の文字とそれが意味するものととの結合は偶然的關係であるに對し、對象を常に現前に、直接に有する直觀にあつては直觀的代表は必然的本質的關係であらねばならぬ。而して直觀的内容が零なる極限が純粹意味作用で、反對の場合が純粹直觀である。かくて純粹なる動的統一による認識とは純粹意味作用が直觀的内容を獲得することによつて不定なる對象を *leibhaft* に現前し、*X*としての對象の超越性を内在化し、*Bestimmbarkeit* から *Bestimmtheit* へ移す無限の過程といひ得るであらう。

以上認識に於ける二つの作用の統一を綜合の過程として解したが、更にその結果に就いて問ふ可きである。即ち認識の眞理性の問題が残されて居る。今これに至る道行きとして意味賦與と意味充實とが單に偶然的に適合一致するか否かの間を以て進まう。直觀的内容とノエマ的材料との結合が本質的であることは直觀の分析より明にされるが、意味指示が直觀の充實を豫想すと云ひ得るであらうか。意味の結合に於て可能的なるものと不可能なるものとがあり、對象に就いて調和的と不調和的とが區別され、之等に夫々直觀的意識と非直觀的意識とが對應し得る。而

して結合に於て互に矛盾するものも意味として成立し統一ある限り意味作用の對象であるから意識は矛盾的なるものも矛盾として結合するは明であるが、かゝる意識が非直觀的なるは只充實の要求を標準としてのみ理解出来る。意味指示の領域が直觀の領域より廣いのはかゝる矛盾的結合が可能なるに對し、直觀の領域が必然的に意味規定を有する點にあるとはいへ、兩者が區別され、又兩者の一致不一致を區別し得る所以は充實の要求を置いてはない。この點で意味指示は充實を豫想すと云はねばならぬ。而して充實の要求の全部充たし得ないもの、部分的に充たし得るものもあるであらう。又全部充たし得るものもなければならぬ。逆に知覺はその全き規定に於て表現さるゝ點から然らざる場合の種々の階段に存する。知覺そのものは眞に言葉 *Wahrnehmung* が示すやうに *Täuschung* がないであらう。それに於ては明瞭の度精しくは *den Umfang od. Reichthum an Fille, die Lebendigkeit der Fille, den Realitätsgehalt der Fille* を持つのみで誤は却つて意味賦與作用との綜合にある。従つて歸一的綜合があると共に認識に於ては分離的綜合が存する。かくて綜合に種々の階段があるが充實の理想は意味志向が含み得る凡てに就いて、事柄が想像に於ける様に影像的にではなく、自らの性質 (*Selbstheit*) を以て現はれる所の純粹直觀の知覺的、眞知

的仕方により十全の規定を現はす極限である。故に純粹直觀であつても想像乃至所謂表象は對象を單に思ひ浮べるのみで、根源的に與へるのではないから充實による綜合の究極的標準は知覺にのみ存する。又信念的性質に就いてのみ云へば、その原始的様態たる *Urforma* の *swiss* の性質に於て、なければならぬ。かく知覺的充實が完全の域に達した場合の十全的知覺が嚴密なる意味の明證或は十全的明證であり、その客觀的對應者を抽離して眞理或は眞理の意味で存在と云ふ。かゝる十全的知覺を理想として凡ての直觀的意識は何等かの程度の *Evidenz im laxen Sinne* (od. *inadäquate Evidenz*) を有し十全と不十全との間の無限の段階に於て存する。⁽⁶⁾ 意味指示よりすれば充實の要求が中心をなすことは、既に充實に於てある意識では明證を規準となすことに外ならない。

こゝに舉げた明證は論理的明證であつてそれが支配する範圍、到達距離は勿論意味と知的直觀作用の綜合の領域に限らる。曩に眞の意味で思惟とは範疇的直觀であることを示したが、以上の明證の標準の上に立つ思惟法則の適應する領域が範疇的充實意識に存することは最早明であらう。而して範疇的直觀の可能なる爲の理想的條件はその對象の可能性の條件たることも對象と作用との雙關より初めて明

瞭に理解される事柄である。意味指示作用を我々は又象徴的思惟として範疇的直観から區別したが、之を支配する法則とは範疇的法則は無關係に成立し、凡ての意味の自由な結合を含む廣き領域を占め純粹論理的文法的法則と呼ばれるが、如何に自由の結合と雖も尙意味と意味との間の統一を失するとは出来ないから、それは Sinn 及び Widersinn に限り Unsinn を除かなければならぬ。こゝに於て文法的法則に適合するものは可能的であり、範疇的法則に適合するものは現實的であるが、後者が前者に適合し、前者の支配の下に存する時は必然的法則であると云ひ得るであらう。

(一) Husserl, *L. U. II* (ii) S. 33.

(二) Husserl a. a. O., S. 200.

(三) Husserl, a. a. O., §. 8.

(四) Twirdnawski, *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand d. Vorstellungen* §. 5.

(五) Husserl, a. a. O., S. 83 f.

(六) Husserl, a. a. O., §§ 38-39, Ideen, §§ 187-139.

五

以上現象學的認識論の主要問題に觸れ得たと信するが、之を要するに意識の本質的構造に就いては Noetisch=Noenatische=Strukturentheorie 意識の形成に關しては Akt-schich

tentheorie' 認識の妥當に就いては Adäquationstheorie を以てし、而して全體を一貫する方
 法は反省による解明にあるとすることが出来る。而して現象學は現實意識の分析
 より、その中に積極的に包藏される事柄を本質の層に於て直視する立場で——又そ
 の意味で Positivismus であるを主張する——事柄自らに忠實な記述を行ふもので
 ある。さて認識の相を取扱ふに際して意味指示と直觀との適合一致として解した
 が、兩者をその何れかによつて、或は第三者によつて綜合し、又は綜合せしめることを
 意味しなかつた。従つて一致せしめることによつて充實的綜合に到達せしめるの
 ではなくして、却つて一致して居るものとして與へられた認識を分析してそれが一
 致して居るものとして解明し理解する。かく充實された認識の相、或は明證に於て
 存する意識を出發點としてそれが明證に於てあることを問題とするのは、充實から
 出發してそれが如何にして可能であるかを問ふ仕方と同じ程度の循環論であるか
 も知れない。併し充實が充實として解明されることは ansich に自らの範圍と深さ
 に於て自らを顯はさない所の、又顯現し得可きであるがそれとして自覺しない「現象」
 が自らの方法を以て自らを entdecken することに外ならない。換言すれば含蓄と顯現
 の根本的關係として反省を深めることである。かゝる立場の現象學は學であるこ

共に自覺的發展と云ひ得るであらう。事柄自らに歸るとは却つてこの自覺的發展を辿るに外ならぬが、自覺は所與に制約される點で所與以外の何ものかを附加するのではなく、自らの深さへ自らを寫すことによつて所與を所與としてあらしむるものでなければならぬ。所與の發展の形式である時間はそれ故に自覺の相へ及ぼすことは出来ない。時間は意識に於てあるが、意識は時間に於て存しない、換言すれば意識は創造的發展と自覺的發展とを有し、兩者は眞の在り方に於ては相伴ふものであるが尙構造上嚴密に區別さる可き兩面であつて意識は自覺に於て存する限り時間以上のものであり、その發展は所與の終局的顯在化を理想とする。

現象學の根本的立場が作用意識としての本質直觀に存し、之に於て自覺されることは何等對象化することではなくして、自らの中に自らを見ることであるとは本論の始に論じた所である。理性的意識の第一根本的形式は *Das originär-gebendes* ∨ *Sehen* ∨ に存すとフツセルは云ふがこのことは作用意識に就いて云ひ得る言葉であらう。對象意識は自覺にとつては所與であるが、眞には意識を見る立場ではない。併し對象意識を除いて作用意識を別の存在とすることは出来ない、ブレンターノが内部知覺を第二次意識として特色附けたのもこの意味であらう。我々は志向性を自覺さ

れた對象意識の本質として解したが、然らば又意識の構造に於て志向性そのものと、志向性を明にするもの、或は體驗自らと體驗の自我とを正當に分析し得るであらう。自我は自覺がそれに於て可能なるものとして、對象Xがそれに就いて意味的規定が行はれる理念たると同じ意味で又一つの超越者でなければならぬ。併し乍ら現象學的に自我とは何であるかを問ふ前に現象學は果して自我を問題とし得るかに就いてその方法自らを顧みる可きであらう。現象學は認識の價值問題を取扱ふのではないから、カント學派の抽象的論理的要請としての自我を問題としないとしても、ナトルプの云ふ様に單に經驗的統一、多樣的統一を取扱ふ⁽¹⁾ことが意識學に許される權能であらうか。又自我は問題の根據となるにしても問題ではないであらうか。個人意識の分析を通してその本質把握によるより外に現象學的研究の出發點なく、又他我の意識との交渉に就いても自己意識の分析よりしななければならぬが、現象學的認識そのものは本質的認識であり、時間的支配を受けない先天的明證を根據とし、又先驗的還元は理性が自らを知る方法で對象を知るのではないから更にそれ以上の知るものへの還元は無意味でなければならぬ。上に取扱つた問題が、自我の Blick を待つて可能であつたとはいへ、對象意識の解明にあつたから自我に觸れる所がなか

つた。併しながら對象意識としての認識と現象的認識そのものとは嚴密に區別す可きであつて徹底的反省的追及を行ふ限り現象學は現象學的認識の現象學に迄到る可きである。而してかゝる最終の立場たる自我學が現象學そのものゝ理念であらう。私は主としてフツセルの現象學を理解し、解説したのであるが氏に残された問題が「自我」であることを思はざるを得ない。然らば現象學は如何にして自我を取扱ひ得るであらうか。現象學的認識と雖も言葉を以つて表現されることは對象意識と變らない。然らば之を以つて對象意識に就いて解したように意味指示と直觀との綜合として解することが出来るであらうか。自我は直觀するものであつてもされるものではない。言葉が若し自我によつて見られるものにのみ適用出来るとすれば自我に就いて何を我々は語り得るであらうか。自我とすら矛盾なくしては云ひ得ぬであらう。又對象化することなくしては何事をも云々する道はないであらう。自我は存在しなげればならない、然も對象化せずして自我を論じ得ないとする二律背反は言葉の狭き解釋より來るに過ぎぬではなからうか。高次の層の表現が可能であるとすれば之に應ずる充實的綜合は自ら又別の意味を有しなげればならぬ。而してこれと關聯する明證に就いても尙大なる問題が残されると思ふ。

私は現象學が自我を問題とし得る道のあることを確信する。然らば現象學的自我とは何であり、如何に解されるか。今は只カントの *Das Ich denke* \vee *muss alle meine Vorstellungen begleiten können* の自我は論理的要請として以外に解されることを注目して現象學のこの困難な問題への通路を探ぐるに止まる。

(1) *Natorp, a. a. O., S. 244*

(11) *Natorp, a. a. O., S. 32f.*